Nice Face

顔語り

深松 努

ふかまつ　つとむ

1965年、富山県生まれ。日本大学理工学部土木科卒業。87年、前田建設工業㈱入社。92年、㈱深松組入社。2008年、代表取締役社長に就任。社団法人仙台建設業協会副会長。

3・11大震災後、仙台の街の復旧・復興に今も尚大きな役割を果たしている建設業界のマンパワー。一分一秒を争う被災者救助の為のルート確保や、大量に発生した瓦礫置場の設営、そして強烈に揺さぶられた数多くの建物の補修工事など、次々に発生する被災地の建設ニーズに対し行政をサポートし、協会幹部として80社以上の地元建設業者を公平に交通整理する深松努さんは、現在全国各地からの要請を受け、誰もが経験したことのない貴重な自身の体験談を伝え歩いている。「これまでの反省点なども含め、実際に起きてみないと解らない様々な対応事例の情報提供をすることにより、今後同規模の震災発生が予測される地域でひとりでも多くの人命が助かることを願い活動しています」。

水力発電所建設の土木工事を大手ゼネコン顔負けの技術力で請負い、会社の礎を築いた祖父の出身地である富山で生まれた深松さんは、小学校入学と同時に仙台で暮らし始める。東京の大学で土木を学び、ゼネコン勤めを5年経験した後、深松組へと入社し、世界経済を震撼させたリーマンショック直前に父親から社長職を託される。「私はこの業界に入ってすぐに現場で大事故を経験していますし、社長となってすぐに体験した世界不況の荒波も実に厳しいものでしたが、常に負けてたまるか！という心意気で仕事に向き合って来ました。ですから、今回も本当に心が折れそうになる場面が幾度も訪れましたが、"必ず世界に誇れる仙台の街に復活させる"という思いを胸に仲間達と力を合わせて前へ進むことができました」。

発災当日東京へ出張中だった深松さんは、翌日福島へ戻る知人の車に同乗させて貰い、13日の早朝にようやく帰仙を果たす。家族との束の間の再会後に協会入りしてから後はまさに戦争だったと話す。「震災直後の夕方から突貫体制で津波を堰き止めた東部道路から海沿いを走る幹線道路までの間に、遭難者を救助に向かう自衛隊や警察・消防の方々が通るくしの歯状の道路を作る必要がありました。その後は大量に発生した瓦礫の処理と、およそ100ヘクタールの広さに相当する3つの仮置き場の設営というニーズに向き合うのですが、そこに一枚の大きな壁が立ちはだかりました」。部局毎に権限が分かれる行政特有の縦割り的な仕組みが、スピードを要する現場での作業の進行を阻害していると感じた深松さんは、市の担当局長に瓦礫撤去に関わる窓口の一本化などを直談判。災害緊急時の現場からの切実な声は行政を突き動かし、新たなシステムのもとその後の瓦礫処理は効率化が加速。現在では優れた復興モデルのひとつとして全国の自治体などからも注目を集めている。「環境局の萱場局長には大変ご尽力いただきました。行政の現場も住民の皆さんからの要望と法律の間でサンドバック状態でしたので、私のような協会の人間が裏方の役目を果たしながら行政をサポートすれば、元の仙台を取り戻そうという思いは同じですので、復興の流れを止めずに進むと考えました。今後は日本全体で助け合い、自分達の子供が不自由な思いをしない国作りを目指さなければいけませんが、その為には業界として若い労働力の確保が急務ですし、国のバックアップも不可欠だと感じています」。

無休で仕事する日々が続くが、家族との団欒の時間が唯一の息抜きだと語る深松さん。世界が評価する耐震化100％のスーパーシティ仙台の礎は、今日も街のあちこちで建物をこしらえる建設マンの存在無くしては築かれないのだと、無言で語りかけてくれた。

インタビュー／安達昌宏　撮影／大沼英樹